

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

【氏名】

小野道子

【所属】（助成決定時）

東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】

パキスタンのベンガリーディアスポラ：子どもの安全保障の視点からの考察

【研究の目的】（400字程度）

パキスタンのカラチ市には、人口の10%を占めるものの統計には表れないベンガリーと呼ばれる人々（現在のバングラデシュおよびミャンマーのアラカン地方出身者）が200万人以上居住している。その中でも、移民2世、3世であるものの無国籍状態にあり、路上で物売りや物乞いをおこなっているベンガリーの女の子たちと母親たちに着目する。イスラームのバルダ（男女隔離）の慣習の強いパキスタンで、女の子や女性たちにとって安心と考えられている家を出て、なぜ路上で物売りや物乞いに従事しているのか考察することを目的とする。路上という場所や安全・安心をどのように捉えているのか、「人間の安全保障」の概念を応用した子どもの安全保障の視点から、カラチの路上で物売りや物乞いを行う女の子たちや同行する母親たちへの聞き取り調査をもとに、子どもや女性一人ひとりの視座に基づく研究をおこなう。

【研究の内容・方法】（800字程度）

本研究は、申請者が博士論文として執筆した内容を発展させ、これまでの文献調査の内容や現地調査のデータを精査した上で、現地での補足的調査を実施するものである。

研究方法は、（1）文献調査と分析枠組みの構築による理論的研究、（2）現地調査の実施による実証的研究を組み合わせた。（1）については、子どもの安全保障についての理論的枠組みの整理を行った。「人間の安全保障」の概念を応用した子どもの安全保障という視点について理論的枠組みを整理し、論文や書籍などによる文献研究をおこなった。子どもの安全保障と子どもの権利という相互補完的な概念分析に加え、「反抑圧的ソーシャルワーク（Anti-Oppressive Practice: AOP）」の視点を重ね、AOPと子どもの安全保障の観点から、新たな分析を試みた。カラチのベンガリーディアスポラの歴史的形成については、英領期からバングラデシュ独立以前の土地所有制度など移住が促進された状況について十分に調査が及んでいなかった点について、補足的な文献研究を継続した。（2）については、2021年10-11月にパキスタンのカラチ市で3週間の現地調査を実施予定であったが、コロナの影響で現地の学校なども休校していたため、2022年8月に延期した。調査日程は短縮したが、カラチのD地区Gマーケットと呼ばれる調査対象地域およびカラチのベンガリーコミュニティにおいて、これまで調査に協力してくれた子どもたちや母親たち、現地のNGOなどの関係者を2年半ぶりに訪問した。ビハーリー（インドからバングラデシュを経てパキスタンに再定住した人々）の研究者に現地調査に同行していただいたことで、ビハーリーのコミュニティを訪問し、ビハーリー支援のNGOなどの関連団体からの聞き取りも実施した。

【結論・考察】（400字程度）

理論的研究については、AOPの観点から、inter-sectionalityの問題、パキスタンの子ども福祉政策における抑圧性、当事者からの目線の必要性、ベンガリーの子どもの安全保障のための支援者の巻き込みの必要性などの考察を加え、東洋大学社会福祉学会において発表をおこなった。パキスタンのベンガリーディアスポラの形成過程については、補足の文献を読み込み、博士論文を補完する情報を追加することで出版助成のための原

稿を仕上げた。今回の現地調査では、博士論文執筆のための調査では訪問できなかったビハーリーのコミュニティや関係団体を訪問したことで、ベンガリーの人々以外の無国籍者や子どもたちを取り巻く状況について多角的な視点を得ることができた。ベンガリーの女の子や母親たちが路上に出てくる理由として、家が必ずしも安全安心な居場所ではなく、路上での友人関係や頼母子講などによる新たな自助ネットワークの形成が挙げられる。路上での物売りや物乞いにより生活を向上させ、路上に通うことを辞めていた子どもたちが、コロナ禍での生活困窮により再び路上に出てきている状況も見受けられる一方で、父親や夫による暴力が増えるなど家の中の不安全が影響を与えている側面もある。本研究の一部は、『教育からみる南アジア社会』（玉川大学出版部 2022年3月発行）に、無国籍のベンガリーの子どもたちの教育に焦点をあてて寄稿した。